佐藤泰志『海炭市叙景』論
―〈無縁〉の集合体―
A study of Sato Yasushi"A description of Kaitan city"
―The aggregation of〈muen(irrelevance)〉―

*小田島　本有
Motoari ODAJIMA

一　はじめに

函館出身の佐藤泰志が四十一歳で自殺をしたのは一九九〇年十月十日のこと、今から四半世紀も前のことである。

佐藤は一九四九年に生まれ、十八歳の時に『市街戦のジャズメン』で第五回有島少年文学賞を受賞。その後、『きみの鳥はうたえる』（八一年）を皮切りに『空の青み』（八二年）、『水晶の腕』（八三年）、『黄金の服』（同）、『オーバー・フェンス』（八五年）と五回にわたって芥川賞候補作としてノミネートされるものの、ついに受賞を果たすことはなかった。この事実が自殺のきっかけになったであろうと言われている。

その後彼は長らく忘れられた存在であった。しかし、その中にあって彼の文学を慕う人々は確実に存在したのである。金子彰子は「手渡された光を見つめて」という文章の中で、佐藤の作品に触れた時の興奮をこのように述べている（福間健二監修『佐藤泰志・生の輝きを求めつづけた作家』、河出書房新社、二〇一四・二）。

ただ、遅れてきた読者としては、これだけの作品を残し、読者に愛されたからこそ映画化もされる作家の作品が、一冊も文庫化されていないという事実に驚き、それを自分だけが知っていても勿体無いと思い、ＳＮＳで流すことを本間さんに勧めたのだった。

『海炭市叙景』が函館市民の熱い思いによって映画化されることを知って興味を抱き、金子は『佐藤泰志作品集』（クレイン、二〇〇七）を取り寄せ、それを読んだ。そして芥川賞候補となった作品が絶版となっており、文庫本もないという事実を知らされたのだった。それでＳＮＳを通じて佐藤作品を多くの人々に知ってもらう活動を始めたのである。結局これが機縁となって彼の作品は次々と文庫本が出版となり、それに呼応して『そこのみにて光輝く』『オーバー・フェンス』が相次いで映画公開されることになった。そして現在は『きみの鳥はうたえる』が四作目の映画として二〇一八年秋に公開される予定である。このように佐藤泰志ブームは確実な拡がりを見せており、これは一つの奇跡と言っても過言ではない。

二　架空の街「海炭市」

『海炭市叙景』は一九八八年一月より連作が始められた。佐藤が三十九歳の時である。この作品は最初に映画化されたというばかりでなく、彼の代表作と言ってもいい。

作品は「第一章　物語のはじまった崖」「第二章　物語は何も語らず」の二部構成となっており、それぞれ九編ずつの短編、合計十八編が収められている。このことについて佐藤の友人でもあった福間健二は自らの著書の中でこのように述べている（『佐藤泰志　そこに彼はいた』、河出書房新社、二〇一四・一一）

*釧路高専　一般教育部門（国語）小田島本有

私たちが佐藤泰志から聞いていた『海炭市叙景』の構想では、個々に収めた二章をなす十八の物語は、全体のちょうど半分にあたり、さらに二章が書かれて全部で三十六の物語からなる作品世界が構成されるはずであった。作品のなかの季節でいえば、ここまでが冬と春であり、このあとに夏と秋とが用意されていたのである。

この発言によると、我々が現在目にすることのできる『海炭市叙景』は佐藤が当初構想していたうちの半分にしかすぎない。しかも、彼は「海炭市」の一年の風景を冬から秋にかけて書き綴る予定だったのである。さらに集英社版単行本（一九九一年）に収録された福間健二の解説には、『海炭市叙景』の各篇につけられた小タイトルはすべて私の詩から採られている。彼が亡くなってしばらくしてからその整理を手伝った彼の本棚に、たくさんのメモ用紙をはさんでふくれあがった自分の詩集をみつけて、私はほんとうに深い感動にひたった。私はすばらしい贈り物をもらったともいえるし、また自分の詩に対して彼の小説から挑戦を受けとったのでもある。」という記述が見られる。ちなみに福間がここで言う「自分の詩集」とは『最後の授業／カントリー・ライフ　福間健二詩集　１９７２〜１９８３』（私家版、一九八三）をさす。佐藤と福間はいわばお互いを刺激し合える関係にあったのである。

佐藤は福間の詩集に羅列されている詩のタイトルからヒントを得、それらを自らの想像力で膨らませていった。舞台は佐藤の故郷である函館市がモデルになっているが、「海炭市＝函館市」ではない。「海炭市」とは「海」（漁業・造船）と「炭」（炭鉱）の街として設定されている。言うまでもなく函館は炭鉱の街ではない。となると、なぜ佐藤は敢えて「海炭市」という架空の街を設定する必要があったのか、との疑問が湧いてくる。

ここにはおそらく佐藤の北海道全体に対する眼差しがあったのだろうと推測される。

北海道はかつて石炭産業で栄えた土地である。しかし、一九八一年の北炭夕張新炭鉱ガス突出事故（死者九十三名）、一九八五年の三菱大夕張炭鉱ガス爆発（死者六十二名）などが相次ぐなか、エネルギーの転換に伴い各地の炭鉱は閉山を余儀なくされる。その途中で数々の労働争議もあった。おそらく佐藤の頭にそのことは十分意識されていたはずである（中でも炭鉱都市としてかつて一九六〇年には約十二万人の人口を抱えていた夕張市が二〇〇七年、三五三億円の赤字を抱えて財政破綻した事実はその象徴と言っていいかもしれない。現在夕張市の人口は八千人台にまで減少し、今もなお借金を返済している段階である。だがこれは佐藤の与り知らぬことであるのは言うまでもない）。

『海炭市叙景』において、海炭市はさまざまな変貌を余儀なくされている。炭鉱やドックで労働争議が起きているのは象徴的な出来事であるし、第一章冒頭の「まだ若い廃墟」に登場していた兄はもともと炭鉱夫であったが、失業している。また、近隣の町村が吸収合併されて海炭市になっており、人口の増加に伴って墓地公園が造成されたりもしている。さらに産業道路が造られたことで道路沿いには次々と大型スーパーをはじめとする建物ができ、街の中心部が移動している。あるいはかつてスラム街だった小砂丘は立ち退きを迫られた結果、かつての面影を失っている。

福間健二監修『佐藤泰志・生の輝きを求めつづけた作家』（前出）には諸氏の『海炭市叙景』に対するコメントが見られる。

越川道夫は、「海炭市」という架空の街の設定は『『海炭市』はここにあり、そしてどこにでもある、ということを意図した」と述べている（「街はまだあるのか」）。また金子彰子は、「読後、目に映るすべての人に物語が潜んでいることを意識せずにはいられなくなるという、視野の広がりをこの小説は読むものに与えてくれる」と語る（「手渡された光を見つめて」）。いずれも架空の街を設定したことでその世界が普遍的になっていることを指摘していると言えよう。また、その描き方という点で、陣野俊史は「どんどん拡大していく格差を受け入れざるを得ない人々を淡々と描くことで、架空の都市『海炭市』を下から眺める、という意図だけが彼にこの小説を書かせていた」（「人生の休暇と、視線の低さ」）と指摘しているし、井坂洋子は「その多くの人は、何らかの傷をおっている。しかし作者はその傷を、深くえぐりだしたりはしない。さらさらと流れるゲンジツの時の間のような、おのおのの闘いかたを示している」としている（「明暗を泳いで」）。両者に共通して見られるのは淡々とした描き方ということである。『海炭市叙景』がこの街に住む人々の姿をそれぞれの短編で浮き彫りにしていたことを思い合わせれば、それはある意味において必然的なことであったとも言える。しかし、そのことに物足りなさを感じた人もいた。世良利和は、「おそらく佐藤のような

書き手の場合、登場人物のリアリティは自らの生きざまとしのぎを削ることによってしか獲得できないのだと思う」とする立場から、『海炭市叙景』の幾つかの作品では「これまでの彼の資質との間にギャップを感じさせたのだ」と、やや批判的な視点を提示していた。

今回、本稿のサブタイトルを「〈無縁〉の集合体」とした。海炭市に住むさまざまな人間群像を描く『海炭市叙景』だが、それぞれの人物たちは互いに殆ど無縁と言ってよいだろう。だが、仔細に眺めてみると本来無縁である人たちが何らかの形で繋がりを持ち、彼らが海炭市という街の構成員として機能している。例えば「3　この海岸に」に登場する満夫は妻子を連れて地元の海炭市で暮らすべく戻ってくる。コンテナが来ず、とりあえず冬の寒さを凌ぐため燃料店を経営する友達に連絡してくれるよう妻に依頼される。その友達というのが「4　裂けた爪」に出てくる晴夫だ。その晴夫は仕事でボンベを運んでいた際手を滑らせ、足の爪を潰す。その痛みを堪えようとしていた彼を助けてくれたのが近くのアパートから出てきた暴力団の男女である。「5　一滴のあこがれ」の主人公淳は十四歳の中学生だが、彼は同じアパートの住人である暴力団の男女の夜の営みのあえぎを聞いている。さらに「6　夜の中の夜」に出てくる忍は、この暴力団の男からシャブを買っている。

かつて桜木紫乃は『起終点駅（ターミナル）』を執筆した時のことについて、最初〈無縁〉というテーマを出版社から提示され、そのテーマに沿って短編を書き連ねていったが、執筆を終えてみると結局〈無縁〉はなかった、と述べている（ＴＢＳ系『王様のブランチ』、二〇一二・五・一二）。人はそれぞれ自分の生を生きるしかないが、他人と全く無縁のまま生きることはできない。『海炭市叙景』はそのことを端的に示した作品と捉えることができよう。

三　「まだ若い廃墟」の持つ意味

まず注目されるのは、この作品の冒頭に「まだ若い廃墟」という話が置かれたことである。兄と妹が初日の出を見るべくロープウェイで山に登るものの、帰りの切符を一枚しか買うことができず結局妹だけがロープウェイで下山し、兄の到着を待つものの六時間以上経っても現れないという内容だ。この兄は結局遭難し遺体となって発見されたことが二番目以降の話の中で明らかにされるが、この事故は海炭市に住む人々の記憶をしばしば喚起させているという点でも、極めて重要な意味を持っている。

兄はかつて炭鉱に勤めていたが今は失業している。妹も失業しており、先行き不安のなか大晦日を迎えるが、兄からの提案で兄妹二人は初日の出を見に行く。家の中を探し回った結果、集まった金は二六〇〇円ほどしかない。しかも山頂で兄はビールを一本買って飲んだため、下りのロープウェイの切符を一枚しか買うことができなかった。

> 俺は遊歩道のほうから歩いておりる、近道だし、たったこれだけの高さだ、それに子供の頃から昼の山は歩きなれている、といった。断固とした口調だった。厭よ、払い戻してきてちょうだい、わたしも歩いておりるわ。兄は首を振った。（略）心配するな、一時間かそこらあれば、ふもとで会える、と兄はわたしの肩を押した。とうとう根負けした。それじゃ、下の発着所で待っているわよ。急いでそれだけいうと、おお、と兄は大きく頷いた。

兄は二十七歳、妹の「わたし」は二十一歳である。この兄妹は父親を事故で亡くし、その後母親が失踪したため、兄は高校中退を余儀なくされ炭鉱夫となった。しかし、その炭鉱も閉山の憂き目に遭う。

「わたし」にとって兄はいつも眩しい存在であった。それは兄妹二人だけの生活を強いられ、兄が生活を支えなければならないなか、彼が殊更「格好いい兄」を演じようとしていたからではないかと想像される。この引用部分からもそのことは伺える。

だが、幾つかの疑問が浮かぶ。兄妹は揃って失業していた。事実初日の出を見に行くことを決めた時も、二人は家の中から金を掻き集め、ようやく集まったのが二六〇〇円ほどである。その金額を当然ながら兄も承知していた。山頂でビールを購入すれば帰りのロープウェイの切符は一枚しか手に入らないことは十分理解していたはずだ。いや、むしろ彼はビールを購入することで歩いて下山することを意図的に選んだと言うべきである。なお、作品全体を読む限り、彼の死が事故によるものなのか自殺なのか、明らかにはされていない。

もう一つの疑問は、なぜ「わたし」が六時間以上も待ち続けたのかということだ。そのことが周囲の眼には異様に映ることぐらい、本人には十分わかっていた

はずである。事実、「わたし」は売店と切符売り場の女がしばしば「わたし」をじろじろ眺め、ひそひそ話し込んでいる姿を認めている。そして、とうとう痺れを切らした女が近づいてきて閉めることを腹立たしげに伝えに来た時も、「わたし」は心の中で「あやまらない。誰にもあやまらない。たとえ兄に最悪のことがあってもだ。他人が兄やわたしをどう思おうと、兄さん、わたしはあやまらないわよ」と思う。その頑なさは何に由来するのだろうか。

仮に「わたし」が待つのをやめて自ら動き、売店や切符売りの女たちにあやまるとすれば、それは兄の異変を認めたことになる。兄は「心配するな」と言ったのだ。「わたし」が動いたりあやまったりすることは、いつも自信に満ちていた姿を見せていた兄を否定することに他ならない。それが「わたし」にはなかなかできなかったのだ。

次の「2　青い空の下の海」における主人公「彼」は婚約者を両親に合わせ、その帰途連絡船の甲板から剥き出しの絶壁を眺めている。「彼」はこの日の新聞で、遭難した青年の回収作業があることを知った。「彼」の脳裏には絶えず青年のことが思い浮かぶ。「どうして僕は、その青年のことばかり考えるのだろう」と、本人も自身を訝しく思っているほどだ。おそらくそれは、その日の新聞記事を見て語った父親の言葉が引っかかっていたからに違いない。

父は、実に取るに足りない、という口調でいったものだ。

「正月だというのに、いい若者が兄妹そろって失業とはな」

定年まで国鉄の保線区で働き、小さな家を一軒持った男にふさわしい口調だともいえる。なおも父は吐き捨てるように続けた。

「少しばかりの金をかりる友達ひとりいないとは情けない話だ。まったく正月に文無しだなんて」

それに第一、この妹はロープウェイの発着所で六時間も待っていたそうじゃないか、と父はどこから考えても理解に苦しむ、といった表情になった。

この父親からすれば亡くなった青年も、その兄を六時間以上待っていた妹も、彼の理解の域を越えていた。この父親は国鉄マンであった。かつての「親方日の丸」の言葉が象徴的に示すように、この父親はいわば国に守られた職場で生計を支えていた。閉山ゆえに失業を余儀なくされた青年に対し、この父親はいったいどれほどの理解が及んでいたのだろうか。

主人公「彼」は自分と亡くなった青年を思い合わせている。自分は曲がりなりにも職業を持ち、結婚も決まった。一方、亡くなった青年は失業しており、しかも独身だった。この明らかな差異はたまたま偶然的なものにすぎないのではないか。「彼」はそう考えながら断崖を眺めている。

「5　一滴のあこがれ」では淳という十四歳の少年が語り手となっている。両親が共働きのため早くに家を出たこともあり、彼は学校をずる休みし、街のデパートを訪れる。そもそもこの一家は父親が仙法志町で塗装会社を経営していたが倒産し、夜逃げ同然に海炭市へ引っ越してきた。淳はそのことに感謝すらしている。もとから切手集めが趣味だった彼にとって、切手売り場が街のデパートにあるということは魅力的だった。彼は切手売り場に陳列された切手に心を奪われるが、このとき彼は見たいと思っていた映画があり、切手の購入額を抑えるべきかどうか迷う場面がある。ちょうどそのとき、彼の耳に入ってきたのが例の遭難事故について語り合っている女子店員たちの会話であった。

ほら、例の人、どうしているの。元旦に山で遭難した男の人の妹さん。あなたの中学の同級生なんでしょう。

女子店員が話している。（略）

どうしているかしらね。中学の頃も物静かで無口な子だったし。

でも、あれは自殺だと思う？

考えたことないわ。

あたしはそうだと思うけど。

皆んなそれぞれ勝手に思えばいいのよ。そうでしょう。

遭難？　僕はふと耳をとめた。（略）すっかり僕は忘れていたのだ。去年の暮れ、逃げるようにこの街に来て、はじめて印象に残った事件だった。（略）心のずっと奥にそっと隠されていたものが急に光を浴びたような気がした。年齢はいくつだったろう。確か、二十六か七だった。

しばらく、切手の入った袋を手にし、ぼんやり眺めていた。その時、朝、アパートで感じたように、また一瞬、胸深く、虹色の輝きが走り抜けた気がした。（略）あの男の人が二十六歳だったのなら、十二年、七歳なら十三年、齢上だ。すくなくとも、僕はその年月を、時々胸に走る光とともに生きて行くことがで

きる。

この二人、十分なお金を持ち合わせていなかったという点で共通している。遭難した青年は山頂でビールを買ったが、その後の兄の様子について妹の「わたし」は、「兄も黙って太陽を見つめていた。（略）兄の表情は変わらなかった。なんだか放心しているように見えた」と述べている（「1　まだ若い廃墟」）。ビールを買うことを決めた時点で、彼には何らかの覚悟があったことを伺わせる記述である。

一方、中学生の淳は小さい女の子の出演する外国映画を見ることを優先し、その結果四種類の切手を買うのをあきらめた（「5　一滴のあこがれ」）。お金が足りないという時点で二人が下した決断の違いが、その後の運命を決定づけたとも言えようか。

なお、この引用部分の終わり近く、「虹色の輝きが走り抜けた気がした」との記述がある。実はこれより以前、隣の部屋から男女のあえぎ声が聞こえてくることに関連して、淳はこう述べている。

まだ、僕は性を知らない。いつかその場に出会うことだけがわかっている。遠い未来のような気がする。でもその時僕は、深夜隣室から響いてくるあんな喜びの声を、自分のものにすることができるだろうか。

そう思った時、一瞬、僕の胸深くに、亀裂のような虹色の光が、走り抜けるのを強く感じた。

未体験の性のことを思い描くとき、淳の心は疼き、ペニスが熱くなる。彼は隣の女も深夜これに近い一瞬の輝きが身体を走り抜けるのかもしれないと夢想している。ここでの虹色の光とは、性に象徴される大人の世界を指しているのだろう。

四　自己を対象化できない男たち

『海炭市叙景』には自己を対象化できない男たちが数多く登場する。

第一章「4　裂けた爪」は、妻の勝子が息子のアキラを虐待していることを知った晴夫の物語である。勝子は後妻だった。晴夫は二階で寝ている息子に「今の母さんと暮したいか」と尋ねるも、息子は無言のまま首を振るだけである。「どんな母さんならいい」との問いに「いらない」という一言が返ってくるだけであった。

すると息子は、その齢で、この世の中のすべてを知ってしまったような妙に大人びた眼で、父を見返した。（略）

「父さんは店に行く。母さんが帰ってもここには入らせないから安心しろ」

彼は十畳の子供部屋に立ちあがってきっぱりといった。自分にも言い聞かせた。アキラは父の手を拒んだ時のまま、顔をそむけている。何故、この俺にそんなふうにするのだろう。きっとまた、俺が勝子を叱ることで明日の母の仕打ちを恐れているのだ。そうに違いない。

ここで「彼」（晴夫）は明らかに勘違いをしている。彼は息子のアキラが自分そのものを頑なに拒否していることに気づいていない。彼は勝子の親友である千恵子と浮気をしている。彼らは皆同級生だった。彼が勝子との再婚をしようとした時、同級生仲間はこぞって反対した。だが彼は、千恵子との結婚は無理でも勝子ならアキラのいい継母になれるとの自信から再婚に踏み切った。

勝子は美人の千恵子に対して劣等感があり、その鬱屈した感情がアキラに対する暴力へと駆り立てていたのであった。だが、そのことに思いが至らない彼は、勝子のことを「わけのわからない嫉妬で頭がおかしくなったのだ」と判断する。

俺は女運が悪い、といつものように彼は考えた。

前の妻が家を出て行き、後妻の勝子がアキラを虐待している事実を、「俺は女運が悪い」の一言で片づける。それは彼の習性にもなっていた。ここには、冷静になって自己を対象化する余地は全くない。

後半の第二章でも同様の男たちが相次いで登場する。

「1　まっとうな男」における寛二は職業訓練校で学び寮生活を送っているが、他の生徒たちよりはずいぶん年上だったこともあり、周囲からあまり咎められることがなかった。その彼はビールを飲んで運転しているところを警察に見つかる

が、彼は「自分の金で買ったビールだ」と言い張る。これが屁理屈であるのは言うまでもない。自分を変人扱いする警官に腹を立てた彼は暴力を働き、これが公務執行妨害となり彼は取り押さえられる。

彼は力の続く限り暴れなければならないと思った。畑を掘り返した時の首都近くの空港建設予定地の百姓のようにだった。あの百姓たちは間違ってはいなかったのだ。そう思った。

ここでの「首都近くの空港建設予定地」とは現在の成田国際空港を指している。建設に至るまではいわゆる三里塚闘争があり、建設に反対する農民や学生たちの激しい抵抗があった。寛二はこの時空港建設の作業にあたっていた人間であり、しばしば作業の中断を余儀なくされた経験がある。火炎瓶のために大火傷をした同僚たちもいた。したがって、彼は「首都の空港建設地にいる百姓や過激派の学生」を「あいつらは人殺しだ。この国にたてをつく、とんでもない大馬鹿者だ」と非難していたのである。この引用部分ではその評価が全く逆転している。

かつて寛二にとって「百姓たち」は自分たちの作業を妨害する邪魔者であり、「大馬鹿者」だった。しかし、今ここで彼が「あの百姓たちは間違ってはいなかったのだ」という思いに駆られるのは、警察に抵抗するという一点で彼らとの共通点を見出したからに他ならない。その背景にあるものには全く目が向けられておらず、その点で彼の理解は表層的な次元にとどまっている。

彼は「若僧」の警官に変人扱いされたことに腹を立て反抗した。

寮でだって、俺は一目置かれ、話しかけてくる時には、むこうはびくびくものなのだ。

この考えが全くの誤解であることは言うまでもない。それが証拠に、彼が警察から病院に一時収容されたとの報告を受けた時、職業訓練校では「やっぱり」と言い合っているし、漁師の友達も寛二の女房から話を聞かされ、「なあに、あいつは昔からああだった」と、二度までも呟いている。彼は昔から周囲に迷惑をかけ続ける厄介者であったが、本人にその自覚がない。改めてこの短編のタイトルが「まっとうな男」であったことが想起される。「まっとうな男」とは寛二の自己認識にしかすぎず、「若僧」の警官から見た寛二は「頭のおかしな男」なのである。

「4　夢みる力」の広一は競馬で借金を重ねていく男である。「今日の俺は、攻めるつもりで守りに入っていた」と思いながらこれを繰り返し、深みにはまっている。それでいながら、彼は「自分は足腰立たなくなるほど破滅するほどの器ではない」と考えている。この安易な自己肯定がいかなる結果をもたらすか、言うまでもない。事実を知らされた時に妻が静かな声で語った言葉、「あんたは気が狂ったんだわ」が全てを物語っている。

「6　黒い森」は、妻が女友達の経営する飲み屋に勤めたことがきっかけで外泊が多くなり、苦労する男の話である。妻を持て余してしまった隆三は息子に「母さんに今の仕事をやめてもらいたいだろう」と尋ねた。それに対してしばらく沈黙を続けていた息子の勉はやがて、「父さんはずるいよ」「父さんの問題じゃないか。自分で何とかしなくちゃいけないのに、俺にきいたって……」と口を開く。息子の父親批判は的を射ていると言えよう。隆三は本来であれば妻と直接向き合わなくてはならない。ところが、それをしようとせず安易に息子の同意を得ようとする父親に勉は我慢がならないのだ。勉は中学生だが、彼の父親に対する厳しい眼差しは第一章「4　裂けた爪」で父親を拒んだ幼いアキラとオーバーラップする。父親が自らを対象化できていないという点でも、両者は酷似している。

さらに「7　衛生的生活」における本田啓介も同様の人物と捉えることができる。彼は職業安定所のカウンターで働く男である。

「なるほど、本田君は新しいもの好きなんだね」

部長の声には明らかにこの四十七歳の部下を軽んじる響きがあった。啓介も同僚や上司から常々、そんな眼で見られている自分を感じてはいたが、それがどうしてなのか、と深く考えたことはなかった。こんな場合彼は、この世の中はカウンターの向うとこちら側でできており、ついで同僚や上司はモネのことさえ知らずに人生を終る連中なのだと考える。何という貧しい人生だろう。啓介は明るい七月の通りを眺めた。

若い頃から、この男は見栄っ張りで、単純な男だ。罪もないほどに、尊大で自分を何者かだと思っている、と青木は考えていた。ここに職探しにやってくる人々の前では、なおのことだ。それに気づいてくれさえすれば、と思ったが、

無理だろう。

啓介は常々自分が同僚や上司から軽んじられているという感覚があった。そのことを彼自身深く考えてはいないが、おそらく彼は自分にその原因があるという自覚はなく、むしろ同僚や上司の側に問題があると考えていたのだろう。彼は自身を高尚な人間と考える傾向があり、それが知らず知らずのうちに対人関係において顕在化する。

彼は職業安定所の職員として、閉山を契機に多くの失業者が訪れるさまを目の当たりにしてきた。いわば海炭市という街の変貌を実感できる立場にあった。しかし、彼は数多くの失業者たちにうんざりした印象しか抱いていない。引用部にあるように、彼は「この世の中はカウンターの向うとこちら側」でできていると考えており、自らを後者の側に置いていた。作品の中で、「自分は幸福だ。すくなくとも、カウンターのこちら側にいる限り」という記述が見られる。あるいは土曜日の午前中で仕事を終えた時、彼に浮かんだ思いは「これで一日半、失業者を見なくてすむ」というものだった。ここから伺えるのは、失業者に対する啓介の眼差しには温かいものが感じられないということだ。それどころか蔑視すら認められる。上司の青木が啓介に感じている問題点はそれなのである。そのことに啓介自身は気づいていない。その啓介は明日モネの美術展に行くことを周囲の人々に語っている。

青木は余程、あれはただのパネルなのだそうだ、ここに書いてある、といおうかと思ったが、やめにした。明日、行けばわかることだ。わかってもどうということはないだろうが。

啓介が望んでいたのは「豊かで文化的で衛生的生活がたやすく手に入る」環境である。その点で彼はそれなりに満足しているのかもしれない。しかし、彼が感じている「衛生的生活」の中身は浅薄なものであることを、この作品はタイトルを通して伝えているとも言える。

五　差別そしてそれを乗り越えるもの

『海炭市叙景』に見られるもう一つの特徴は、この街に被差別地域が存在していたことがしばしば描かれていることだ。佐藤は既に『そこのみにて光輝く』の中でサムライ部落と言われる地域の住民を描いていた。

第一章「8　はだし」では、閉店まぎわに「酒をくれ」と泥酔したアノラック姿の男が現れる。この店は酒を出す一方で、女性従業員が体を売ることをなりわいとしていた。そのことは『そこのみにて光輝く』のヒロイン大城千夏とも繋がる。アノラック男も女を買う目的で入ってきたのだろう。「金ならある」と喚くように言い、なかなか店を出ようとしない。そしてこの男は早口になってまくし立てるのだが、その時発せられた浜言葉が男の素性を明らかにしていた。「馬鹿にするな」という叫びも、彼が従業員たちから蔑視を受けたと感じたからに他ならない。

第一章「4　裂けた爪」でも、「父は少年の時から彼（注・晴夫）に教えてきたのだ。小砂丘のあたりに住んでいる連中も、古新開町の夜の女たちも、今日のふたり（注・暴力団の男女）のような人間も、絶対に近づいてはならない。彼らは、この街の陽の当らない裏の部分であり、はっきり区別をつけるべきだ」と教え諭していた、という記述が見られた。

佐藤はこのような蔑視が架空の海炭市のみならず、実際に存在しているという現実から目を逸らしていない。むしろ『そこのみにて光輝く』が端的に示すように、蔑視の問題そのものが彼にとって宿痾のように根づいていたということである。そのことを踏まえてみた時、彼が第一章に「7　週末」という短編を置いたことの意味は極めて大きい。

ここでの主人公は路面電車の運転手を長年にわたって務めてきた達一郎である。この日彼は結婚した娘の出産を今か今かと待ちわびていた。彼は運転をしながら、娘の敏子が結婚をしたいと言い出した時のことを想起する。

敏子が洋二と結婚したいといいだした時、家内は反対した。理由は簡単だ。洋二があの元スラムの小砂丘の出身だからだ。五年前まで小砂丘はバラックの群れだった。あの辺の人間には、ろくなものがいない、というのがこの街の人人の根強い考え方だ。彼もそう思ってきた。洋二は中学しか出ていない。敏子は女子だけの商業高校を卒業している。洋二の父も、廃品回収業で、達一郎と同じほどの年月をリヤカーを引いて街中歩いた。

「家内」は洋二がスラム地域出身であり、中学を出てトビ職をしていることを理由に強く反対した。「家内」の態度は特別なものではない。おそらく大抵の人は同様の反応をしたであろう。達一郎自身もスラム地域に対する蔑視がなかったわけでもない。だが、達一郎は一日考えた末、娘の願いを受け入れた。「トビ職ですよ」との「家内」の言葉に対しては、「それのどこが悪いんだ」の一言で片づけたのである。これだけを見ると達一郎は理不尽のようにも思われるが、彼のこの時の判断は間違っていなかった。

敏子の夫は働き者だ。（略）無駄な口を利かない青年だ。背が高く、ごつごつした体格の男で、よく仕事の出来る青年だと、その無駄のない仕種や無口さでよくわかる。すくなくとも彼には見抜ける。家内も今では何ひとつ不満を持ってはいない。

娘の夫である洋二に対する達一郎の評価は全く揺らいでいない。そしてかつてあれほど反対した「家内」も、今では何ひとつ不満を抱いていないのだ。洋二という人間そのものを評価しているということなのだろう。

敏子が結婚の話を持ち出した時、洋二と一度会った。彼は自分の父の話を、何のこだわりもなく話した。

親父は海炭市の旧い市街地なら、どんな道でも知っています。俺はビルの鉄骨の上から街を眺めていますよ。

その言葉の中に、結婚に反対しても無駄だ、という強い意志を、達一郎は敏感に察した。洋二の父はリヤカーを引き、街中の道を歩いたのだ。それがわかれば、充分だ。

洋二の父は廃品業者であり、リヤカーを引いて街中を歩いていた（ここには佐藤の親の姿が投影されているのは明らかである）。洋二は父に引け目を感じるどころか、むしろ誇らしく感じている。「親父は海炭市の旧い市街地なら、どんな道でも知っています」という言葉がそのことを端的に示している。そして、洋二自身も自分の仕事に対して誇りを抱いていた。つまりこの親子は、それぞれの仕事に従事するなかでこの海炭市を隈なく見てきたのであり、この街を底辺から支えているのは自分たちだという誇りを抱いていたのである。一方の達一郎も五十二歳になるこの時まで運転手として働き続け、一度も車との接触事故も人身事故も起こしたことがない。優良運転手として三度も表彰され、彼もまたプロとしての誇りを抱いていた。この街の様子を隈なく見てきたという点で彼らには通底し合うものがあったし、達一郎が洋二とその父親を評価したのも十分伺える。

佐藤はこの作品のタイトルを、「海炭市叙情」ではなく「海炭市叙景」とした。彼はこの作品を通して、海炭市に住むさまざまな人たちの映像を写し出し、彼らの住む海炭市を重層的に浮き彫りにすることを心がけた。彼らはそれぞれが一見すると無縁のように思われがちであるけれども、何らかの形で繋がっており、全く孤立無援の人間というものはいない。作品は完結していないものの、この作品は佐藤泰志という作家の代表作としての位置を揺るぎないものにしていると言えるのではないだろうか。